海女さんの文化

漁の道具や服装など
海女の文化を読み解きます

「海女」をとりまく物語

弥藤 邦義さん（畑田）

九戸歴史民俗の会理事。平成21年、ラジオドラマ「北限の海女」の文芸評論により、9年ぶりの市民文芸賞受賞者となる。

久慈周辺の潜水漁師については、寛政2年（1790）に訪れた高山彦九郎が、著書『北行日記』に野田の海士について記述しています。また同時期、大槌の前川善兵衛の文書中にも「野田潜」という言葉が登場しています。このことからも、久慈地域では、ある程度の海士文化の歴史があったものと思われます。

一方の海女は、明治20年頃に久喜の人が潜ったのが初めといわれています。文書に記述されたのは、昭和12年。津波の調査で訪れた地理学者山口弥一郎が『民間伝承』で報告したものが初めと思われます。

久慈の海女には、よその海女のように数百年にわたる長い歴史があるわけではありません。また、伊勢神宮にアワビを奉納する伊勢志摩の海女のように神事と関係した文化があるわけでもありません。しかし、海女の北限地という厳しい環境の中、挫けることなく逞（たくま）しく生き抜いた海女たちの生きざま。それにこそ注目するべきではないでしょうか。

故・水木洋子さんが小袖で老海女「北田トメ」と出会ったことで生まれたラジオドラマ「北限の海女」の物語や、浜と街をつなぐ海女の道にまつわるさまざまなエピソード。このような地域の記憶、物語を掘り起こして、活用していければ面白いのではないかと思っています。

海女スタイルの移りかわり

セーター

昭和40年代

羊毛のセーターと股引の上下セット。保温と岩などからの体の保護を両立しています。夏でも海水温が低い、荒い波の打ち寄せる岩場という環境から求められた服装といえるのかもしれません。

カリマタ

～昭和30年代

かつては、カリマタと呼ばれるふんどしだけで潜ったと伝わっています。南方の海女と同じスタイルです。写真が残っている昭和30年代では、すでに黒の短パンになっています。

絣の半纏（かすりはんてん）

観光海女衣装

絣の半纏（かすりはんてん）に白い短パン赤い帯という昭和40年代から変わらない観光海女のスタイルです。

昭和30年代は、上半身は裸の短パン姿。その後、腰巻きなども試してこのスタイルになりました。

ウェットスーツ

昭和50年代～

ウェットスーツは昭和50年くらいから普及しだしたとのこと。それまでの毛糸のセーターなどと比べると、格段に寒さに強くなり、何時間でも潜れるようになったそうです。

海女さんの話

海女の漁を支える道具

カギ

（磯カギ、ソイカギ）

ウニ採りの際の必需品。岩に張り付いたウニをはがすほか、タモ網にかき込んだり、岩に引っかけて勢いをつけて潜ったりします。カギ先は専用のものですが、最近はアワビカギの流用も多いようです。海中で沈まないように、柄は桐（きり）などの軽い木材を使用。手を自由に使えるように、ひもをつけて手首に通して使う人が多いようです。

手拭い

古今東西、ほとんどの海女さんに共通する装備品。髪が下がってこないようにかぶるものです。

ヤツカリ

腰に結び付け、採取した獲物を入れる網。誰にでも作れるものではなく、網を作る技術をもった人に作ってもらうそうです。現在は化学繊維製ですが、手作りするのは変わらないそうです。

水中メガネ

片目ずつ覆う二眼メガネが古く、この辺りでは「松島メガネ」と呼ばれます。松島から買ってきたからという説が濃厚。写真は「ワッパ」または「バッパ」と呼ばれる一眼メガネです。

オモリ

石や鋳物、鉛など種類があります。本来は深く早く潜るためのものだったようですが、ウェットスーツでは浮力調整のためにオモリ付きのベルトを着けています。